

熱中症対策ポイント | 聴覚障がい・発声が困難な方

芸能現場における熱中症から人を守る基本原則

熱中症対策は「自己管理」に委ねるものではなく、現場で確実に運用される仕組みが必要です。無理をしないように伝え、体調不良を申し出やすい環境を整えてください。「やめてください」「休んでください」と周囲が声をかけられることが安全につながります。

事前にできる対策は確実に実施してください。プレクーリング（事前冷却）、冷却用品の準備、適切な水分・塩分補給（取りすぎに注意。高血圧等は 医師に相談）など、リスクが高い条件では一層の配慮が必要です。

高齢者や若年者など、発言しにくい立場への配慮も重要です。安全対策に要する費用や設備は必要経費として位置付け、現場全体で共有してください。

■ ■ ■

聴覚障がいのある方や、発声が困難な方にとって、熱中症対策における大きな課題の一つは、体調の異変を音声で伝えられないことです。

現場では「声かけ」による体調確認や、「助けを呼ぶ」ことが前提となっている場合が多く、これが熱中症の発見の遅れにつながるおそれがあります。

厚生労働省は、障がいのある人の熱中症対策として、本人が体調の変化を伝えやすい環境づくりや、周囲が変化に気づく工夫の重要性を示しています。

これを踏まえ、本ガイドラインでは、状態を視覚的に共有できる、「熱中症状態表示カード」の活用を推奨します。

具体的には、熱中症の進行段階を「初期」「中期」「重症」の3段階に分け、それぞれを色で区別したカードを用意する方法です。

- ◆ 初期（例：緑）
のどの渇き、軽いめまい、暑さによる違和感
→ 水分補給・休憩が必要
- ◆ 中期（例：黄）
頭痛、吐き気、強いだるさ、集中力の低下
→ 作業中断・冷却・周囲への共有が必要
- ◆ 重症（例：赤）
意識がもうろうとする、立てない、反応が鈍い
→ 直ちに医療対応が必要

カードは、首から下げる、ポケットに入れる、スマートフォン画面で表示するなど、本人が使いやすい形で運用してください。休憩を取りたいときや体調に異変を感じたときに、声を出さずにカードを提示できることで、周囲が状況を理解しやすくなります。

あらかじめ現場全体でカードの意味を共有しておくことで、合理的配慮としての安全確保につながります。

熱中症対策は、個人の注意だけでなく、伝えられる仕組みを整えることが不可欠です。

音声に依存しない対策を取り入れることは、多様な働き方・参加の形を前提とした、安全な環境づくりの第一歩となるでしょう。

熱中症対策ポイント | 危険度「見える化カード」

— 誰でも使える、誰にでも伝えられる共通の熱中症対策 —

趣旨

熱中症対策では、体調の異変を早く、確実に共有できることが重要です。声を出しにくい、言い出しづらい、気づかれにくいといった事情は、誰にでも起こり得ます。厚生労働省も、障がいのある人や高齢者の熱中症対策として、体調を伝えやすい工夫と早期対応の重要性を示しています。本ガイドラインでは、特定の人に限らず、誰でも使える視覚的な状態表示カードの活用を推奨します。この方法は、児童、シニアの方、聴覚障がいや発声が困難な方、体調不良を言い出しづらい状況にある方など、現場にいるすべての人に共通して有効な安全対策です。

【運用のポイント】

- 体調の段階を初期・中期・重症の3段階で示します
- 色と記号（青・○／黄・△／赤・×）を用い、一目で判断できるようにします
- 各自のスマートフォンに保存したり、休憩所や水分補給場所（いわゆるお茶セット）に、飲料や塩分補給用品とあわせてカードを設置します。
- 声を出さなくても、カードの提示で休憩や対応につなげます

【状態表示カードの例】

- ◆ 初期（青・○）
めまいや立ちくらみがあり、少し不安を感じる
- ◆ 中期（黄・△）
頭痛・吐き気などがあります。作業から離脱する必要があります
- ◆ 重症（赤・×）
熱けいれん、体が熱いなど強い不調があります

【対応の考え方】

- ◆ 軽症（青・○）では涼しい場所で休み。水分・塩分等を補給
- ◆ 中等症（黄・△）では作業から離脱して、休憩や冷却を行います。
- ◆ 重症（赤・×）では直ちに作業を中止し、周囲が緊急対応します。

【まとめ】

危険度を「見える化」するカードは、誰もが使える共通の安全ツールです。休憩所や水分補給の場に設置したり、スマートフォンに保存して状態を視覚的に共有することが、熱中症の予防と早期対応につながります。

※見える化カードのイメージ例

